

あるクリスマス・イブの話

キリストはなぜ人となってこの世に来られたのでしょうか。神がひとり子を遣わされたその思いを教えてくれているクリスマスの話があります。（以下その要約です）

長いこと教会に行かないでいる一人の老農夫がいた。あるクリスマス・イブのこと
「今夜はクリスマス・イブだって？神の子がこの世にお生まれになった？なにをばかばかしい。そんなことがあるものか」

彼が雪の降るクリスマス・イブに一人家にいると、突然窓ガラスに何かが次々とぶつかってきた。それは夜闇の中をこの家をめざしてくるたくさんの小鳥であった。

彼らは明かりを求めて、ガラス窓に次々と打ち当たってはむなしく軒下に落ちていくのであった。

それを見た農夫は「小鳥たちを助けてやらねば」と思い、雪の中を一目散に納屋へ走って行って扉を開け放った。そして電灯を明々と灯して小鳥たちをそこに呼びいれようとして叫んだ。「こっちだ、こっちだ、こっちへ来い！」

しかし小鳥たちは、彼の必死な叫び声に答えず、なおもガラス窓に突き当たっては死んでいった。

農夫は思った。「ああ、わたしが小鳥になって、かれらの言葉で話しかけて導いてやることのできたなら！」

その瞬間、老農夫はとつぜん悟った。
「神が人々を救うために人になられてこの世に来られた」という意味を。「地獄に落ちようとする罪びとを導いて救おうとする心」を。

彼は強い感動に包まれて、思わずその場にひざまづいて神に祈りをささげていた。

白浜満神父「わかりやすいミサと聖体の本」
原作ルイス・カッセルズ：佐久間彪神父訳詩
「あるクリスマスの出来事」
出版：女子パウロ会